様式第5号（第9条関係）

論 文 内 容 の 要 旨

報告番号		氏　名	鍜治　大祐
Patient Satisfaction and Hand Performance Following Fingertip Reconstruction: A Retrospective Cohort Study （指尖部再建術後における患者満足度とハンドパフォーマンスについての後ろ向き検討）			

論文内容の要旨

【目的】指尖部損傷に対しては動脈皮弁による再建術が行われることが多い。また、日常生活で再建された指を使用しているかなどの判断には患者立脚型評価として DASH や Hand20 などが用いられている。しかしながら、これらの立脚型評価は社会心理学的要因に影響を受けることが知られており、実際行っている生活動作の実状と異なる可能性がある。一方、パフォーマンステストは日常生活で手をどのように使用しているかを実際に評価できる。本研究は、術後の患者満足度の調査や、ハンドパフォーマンステストを使用することにより客観的機能評価を行い、結果に影響を与える因子を統計学的に特定することである。
【対象と方法】2003 年～2013 年に奈良医大付属病院ならびに田北病院にて示指及び中指の指尖部損傷に対して動脈皮弁術を行い、術後1年以上経過後に評価できた 25 症例を対象とした。検討項目は主要評価項目として患者満足度およびハンドパフォーマンステスト、副次評価項目として知覚、指関節可動域、tip pinch、年齢を選択した。各々の関連性を統計学的に解析することで、主要評価項目に影響を与える因子を検討した。
【結果】患者全体の 96%で患者満足度は高かった。しかし、パフォーマンステストに関して受傷指は非受傷指に比べて平均約 77%の結果であった。また、知覚に関しては 16%が触覚正常、52%が触覚低下、32%が防御感覚まで低下していた。指関節可動域と tip pinch に関してはともに健側比約 82%であった。ハンドパフォーマンスの結果と有意に関連性を認めたのは知覚と年齢であり、患者満足度と有意に関連性を認めたのは指関節可動域と知覚であった。
【考察と結論】手術により再建された指は非受傷指と比べてパフォーマンスが不良であったが、患者満足度は高かった。受傷指の知覚の改善が患者満足度や指の機能に特に影響を与えやすい因子であると考えられる。指尖部損傷に対して、高い満足度や良好な機能の改善を得るために知覚皮弁での再建が有用である。